

酢漿草・片喰

道端、公園、石垣など、いたるところで見られる野草の一つです。小さな黄色い花と三枚の葉は誰しも目にしたことがあるでしょう。日当たりが良い場所で地面に広がる様子には、まさに“雑草”を感じます。

葉は光に反応し、曇って薄暗いときや夜には休眠します。閉じている葉の形が欠けて見えることからカタバミ（片喰…片方食まれた）という名がついたとされます。葉や茎にシュウ酸が含まれ酸っぱいことから酢漿草と書き、「すいば」「しょっぱぐさ」「すいものぐさ」という別名も持ちます。酢漿草はサクショウソウ・ソショウソウという生薬名でもあり、民間療法では消炎、解毒などに利用されていました。

春から秋にかけて花期も長く、次々と小さなオクラのような実がなって柄を伸ばして立つ姿はロケットに形容されます。熟すと少しの刺激でも実からタネが飛び出すその仕組みは、…タネが大きくなると、タネの周りの弾力性のある皮が破けて反り返り、その反る力でタネが弾かれて実を縦に裂き、隙間から斜め上へと高速で飛び出す(破けた皮も斜め下へ落ちる)…という優れものです。タネが飛ぶ距離は1～2mにも達するとされます。

繁殖の旺盛さは家が絶えないことに通じると、日本では家紋に用いられてきました(片喰紋は五大紋の一つ)。日本的伝統を感じますが、じつは、カタバミ属は世界中に分布し、南アメリカやアフリカなどに多い植物なのです。

おなじみの黄色い花のカタバミも、農耕の伝播に伴って大陸からやってきた「史前帰化植物」だとされています。ケカタバミやアカカタバミもその変種で、なかでもアカカタバミは乾燥に強く、都会の舗装道路などでも見られます。

白い花を咲かせる仲間が、古くから日本列島で暮らし続けてきた自生種のカタバミなのでしょう、本州、四国、九州の山地に自生するミヤマカタバミはその代表種です。今年の春には北山で清楚な花に出合えました。日本海側の山地に見られるヒョウノセンカタバミ、東海地方などの山地に見られるカントウミヤマカタバミはミヤマカタバミの変種、その他に、針葉樹林下を好むコミヤマカタバミ、地方によっては絶滅危惧種となったオオヤマカタバミがあります。

「史前帰化植物」のカタバミに加えて近世以降にやってきたカタバミ属も、自生種たちを後目に平野部で繁栄してきました。江戸時代末に南アメリカから観賞用にもたらされて野生化したムラサキカタバミはすっかりおなじみです。明治時代に南アフリカから持ち込まれたオオキバナカタバミも、侵入生物として記載されるまでになりました。カタバミに酷似するオッタチカタバミは北アメリカ生まれの外来種で、1961年に京都府精華町で発見されて以来、各地の都市部で増加し続けているとききます。

園芸種のカタバミ属はオキザリスと呼ばれます。美しい品種がたくさんあり、いずれも病虫害に強く人気が高いようです。オキザリスは、ギリシャ語の酸っぱい「oxys」からきていて酢漿草と同じ由来、あわせて酸素(オキシジン)が「oxys」から生じてOの元素記号となったことなども連想させられます。

大昔、植物が陸上に進出していく過程で、生育に欠かせないリンや鉄を吸収可能な形にするためにつくり出したのが有機酸・シュウ酸だったのかもしれないのですが、それはムシに対抗する成分としても働きました。シュウ酸を多く含むカタバミは強靱で、人が簡便に手に入れられる草だったようです。「酢漿草で鏡面を洗った」という記録も残り、「かがみぐさ」の別名も持っています。葉で銅製品をこすると、表面の酸化銅が銅イオンとなって溶け、黒い錆びが洗い流されてピカピカの銅が現れるのです(10円玉で試してみることができる)。カタバミは、銅鏡だけでなく仏具を磨く材料にもなっていたとか。

身近なカタバミに目を向ければ、植物の生態、文化、そして外来種問題についても教えてもらえそうです。



カタバミ
哲学の道にて 2017.4.28



ケカタバミの実
森のセンターの近くにて 2017.6.25



ミヤマカタバミ
北山花脊にて 2017.4.23



ムラサキカタバミ
森のセンターの近くにて 2017.5.14